

教育長就任にあたって

〔プロフィール〕

昭和 33 年、埼玉県深谷市生まれ。昭和 57 年 4 月、埼玉県公立高等学校教諭に採用され、県立大宮工業高等学校に着任。県教育局県立学校人事課副課長兼主任管理主事、県立吹上秋桜高等学校長、県教育局高校教育指導課長、県立学校部副部長などを経て、平成 28 年 4 月、県立浦和第一女子高等学校長に就任、平成 31 年 3 月定年退職。令和 2 年 4 月より現職。

埼玉県教育委員会 教育長 **高田 直芳**



はじめに

令和 2 年 4 月 1 日付けで教育長に就任いたしました高田直芳です。これまでの経験を生かし、埼玉教育のさらなる充実に向けて精一杯取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

この原稿を書いている時点において、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、学校はいまだ休業中の状態です。昨年度末の突然の一斉休校から、はや 3 か月近い時間が経過しようとしています。この間、卒業式や入学式等への対応、あるいは、休業中の児童生徒への学習支援に向けた取組等、緊急事態下でありながら適切に御対応いただいた関係者の方々に、心より感謝申し上げます。また、学校の再開を心待ちにしている児童生徒及び保護者の皆様に、つらい思いをさせてしまっていることについて、本当に心苦しく思っております。一日も早い感染症の終息を祈りながら、学校再開の日に向けて、学校現場と連携して準備を進めているところです。

こうした状況ではありますが、この誌面をお借りして、教育長就任にあたって私自身の考えを述べさせていただきますと思います。

1 いま教育がなすべきこと

―先行き不透明な時代の中で―

私たちの生きる現代社会は、めまぐるしい変化・進化を続けています。A I の進歩に顕著なように技術革新はめざましく、人間の生き方そのものを変える勢いです。また、今般のいわゆるコロナ禍のほか、地震や水害といった災害にいつ襲われるかわからない中で、私たちは日々生きています。日本が、そして世界が、この先の 10 年で一体どのような変容を見せるのか、確かなことは誰にも言い当てることはできません。

このような時代において教育がなすべきこととは、先行き不透明な時代をたくましく、そして、心豊かに生きていける子供たちを育てていくことだと私は考えています。自分が進もうとしている道が正解なのか、その先に何が待っているのか、確かなことは分からない、それでも勇気を持って未知の世界へ一歩を踏み出

せるような力が、これからの社会を生きていく子供たちには不可欠です。そのためには自信が必要です。そして自信を持たせるために、子供たちに基礎基本をしっかり身に付けさせ、その上で自己肯定感を育むことが、学校教育に求められています。学校という場が、子供たちが社会の中で自立的に生きていくための土台を築くことのできる、豊かな学びの場であってくれたらと願っています。

2 確かな学力の育成

―第 3 期埼玉県教育振興基本計画と

新学習指導要領―さて、保護者あるいは社会が学校に第一に求めること、それはやはり子供たちの「確かな学力の育成」ではないでしょうか。本県の「第 3 期埼玉県教育振興基本計画」においても、「確かな学力の育成」を筆頭目標として掲げています。

今年度、第 3 期計画は 2 年目を迎えます。「豊かな学びで 未来を拓く埼玉教育」の基本理念のもと、成果を見据えてそれぞれの施策を着実に推進してまいります。また、新学習指導要領が今年度の小学生から順次全面实施され、本格的に新しい時代の教育が幕を開けます。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善が強く求められています。自ら課題を設定し、正解が 1 つではない問いと真摯に向き合い、他者との学び合いを通して探究を続けるという学びの在り方が、目指すべきところにあるわけです。

ところで、本県が他県に先駆けて行ってきた特徴的な取組に、県独自の学力・学習状況調査（小中学校）や知識構成型ジグソー法を取り入れた協調学習があります。これらの取組が、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」と、通底する部分があることは偶然ではありません。時代がそのような教育を求めているのです。その意味では、埼玉県の学校教育は将来を先取りするように進められてきたわけで、どうか学校現場の先生方には御自身の取組に自信を持っていただきたいと思います。ただ一方で、定着の感がある取組だからこそ、これまでの成果を丁寧に検証し、次の展

開に向けてステップアップを図る時期を迎えているようにも感じています。さらなる高みを目指して歩みを進めたいと考えています。

3 特別支援教育の充実

―新校準備とインクルーシブ教育の推進―

特別支援教育に目を向けてみたいと思います。先生方の御尽力による教育力の向上や特別支援教育に対する社会的な理解の深まり等により、特別支援学校に在籍する児童生徒数については増加傾向が続いています。その結果、過密状況となり、先生方や児童生徒、あるいは、保護者の方々に御不便をおかけしている状況です。

県では、平成 31 年 3 月に「埼玉県特別支援教育環境整備計画」を策定いたしました。この計画に基づき、新校設置の検討を進めていくほか、特別支援学級の充実等にも取り組んでまいります。来春 4 月には、県立戸田かけはし高等特別支援学校及び松伏高校内に県東部地域高校内分校（仮称）が開校予定であり、順調にその準備が進められています。教育環境整備に向けた大きな一歩になるものと期待しています。

また、高等学校における通級指導も、今年度で 4 年目を迎えました。インクルーシブ教育の理念を踏まえつつ、特別支援教育の充実に向けて取り組んでまいります。

4 解決すべき課題

―働き方改革の推進と不祥事根絶―

解決を急がなければならない課題もあります。私は、その最優先事項として「学校における働き方改革の推進」を掲げています。社会全体で働き方改革が進められている中で、学校だけがこの流れから取り残されていくのではないかと危惧しています。

今回の新型コロナウイルス感染症拡大による学校の休業が長期化する中で、学校とは何か、授業とは何か、教師とは何かなど、学校教育の本質的なことが問われています。今後も第 2 波がいつ来るか予想できません。より効果的かつ効率的に児童生徒の学力向上を図り、学校行事などを通じて豊かな心と健やかな体を育てるにはどうすればよいか、優先順位をつけて取り組むことが求められています。

各学校では是非とも学校全体の業務の棚卸しをしていただきたいと思います。スクラップ＆ビルドと言いますが、学校はスクラップが苦手です。教育委員会として、先生方が児童生徒の新たな学びの創造に専心できるよう働き方改革を推進してまいります。校長先生方におかれましても、こうした危機的な状況を踏まえ、各学校の業務の改善、削減に取り組んでいただきたい

と思います。

もう 1 つ、「不祥事根絶」も大きな課題です。まず根本的なこととして、教職員の方々に、自らの職務の尊さを再確認していただきたいと強く願います。未来を担う子供たちの指導に直接携わる教職員の仕事は、重い責任と負担はありながらも、一方、他の職業では味わえない感動と喜びに満ちています。教職に携わることの意義を自覚し、使命と誇りを持って職務に当たることこそが、やはり不祥事根絶に向けた出発点であると思います。教職員の方々に、私のこの想いを受け止めていただきたいと思います。

結びに

最後に、新型コロナウイルス感染症について改めて触れて、結びたいと思います。

今般のコロナ禍は、教育にも様々なテーマを投げかけてきました。私が強く認識したのは、学校とは子供たちの学びの場であると同時に、水道・電気・ガスとともに、人々の生活を支える重要な社会の基盤なのだったということでした。休業が続く中で、先生方は、子供たちの消えた学校で虚しさや寂しさを噛みしめたかもしれませんし、児童生徒は、毎日学校に通って先生や友達と過ごすことができるのは、当たり前のことではない奇跡の時間だったのだと気付かされたかもしれません。今ここで抱いた様々な想いをずっと忘れてはならない、私はそう思っています。

また、オンライン学習をはじめ、ICTを活用した教育の必要性、その実現のための環境整備も大きなテーマになりました。国による GIGA スクール構想により、義務教育段階における児童生徒 1 人 1 台の端末整備が着実に進められています。先生方の力で新たな学びのスタイルを追求していったほしいと思います。その一方で、これまで長らく培ってきた、先生と児童生徒が教室の中で対面し、同じ時間と空間を共有するスタイルでしか学べないものもたくさんあります。これを機に、従来の授業スタイルとオンライン学習、それぞれの持つ限界と可能性とをきちんと検証することで、例えば両者の持ち味を融合・併用するような形で、これまで発想しなかった新しい教育方法を生み出すことができるかもしれません。

多くの先生方が、コロナ禍によって数々の苦しい思い、悔しい思いを味わっています。それでも、休業中に皆さんが抱いた様々な想いを、新たな一歩を踏み出す原動力にしようではありませんか。もしかしたら、先行き不透明な時代をたくましく、心豊かに生きていくとはどういうことなのか、子供たちに対してまずその範を示せという課題を、我々教育に携わる大人たちはいま、課せられているのかもしれません。